

我楽多物語(1)

池田彦三郎

書き出せばきりがない。こんなこと、あんなこと、が思い出されてくる。それは私自身の楽しい数々の思い出であり、言葉をかえれば自己満足の姿もある。

戦後しばらくして、いつ頃のことか、図書館の1階にあった教育委員会の一室で、鈴木（現収入役）さんと西方良三さんだと思うが話しあっていた。西小磯の山の中腹には方々に横穴があいているが何だろう、とのことであった。たまたま私が居合わせて、耳学問の聞きかじりの知識をもっともらしく披露した。それが機縁で郷土史に興味を持つようになり発掘、調査へと研究心が燃え上がった。私と鈴木さんの2人3脚が始まった。

誰か良い指導者はないかとのことで、たまたま大磯小PTAの役員をしておられた西小磯在住の毛利さんの話題が出た。氏は国学院大学の事務長とか。話をしたところ、それならばと、大場磐雄先生よりも樋口清之先生が若いし、良いだろうと、大磯へお連れ下さった。同好者10人程、早速お供をして山王町から高麗の方へかけて、いろいろと現地指導を受けた。この樋口先生はテレビで御存知の方も多いと思う「何でも知っている先生」樋口先生である。

こうして熱は高まり、文化史編纂へと進むのだが、この間横穴の調査や遺跡調査、遺物収集と暇をみては大磯の山野を歩いた。町の人は、物好きな、と考え、この忙しいのに閑人だな、と思われたことだろう。金にもならない土器片を拾ってなどと。それでも小さな

破片1つを拾っても、そこに残る文様を見ては古代人の息吹きを感じるような気持ちで興奮し、少しずつではあるが資料を集めた。時を経るに従い要求水準が上がり、よりよい物をと願い発掘を手掛け、所蔵家を尋ねて資料の寄附を願った。収集するなら今、いまに一般の関心が高まればできにくくなるし、遺物も滅失していく、と。

収集に際しては、この資料は私の私物に、或いは私物化することはしない。町の文化財として教育委員会で大切に保存し、町民のために役立てることを約束し、私自身堅く守った。町の人たちも理解し、更にいろいろと情報も寄せて下さった。こうして附近の市町村では珍しく各種の資料が集まった。故吉田市五郎先生にも協力をいただいた。ここまで来ると並べてみたり、資料室を設け、陳列戸棚や展示用小箱等を家具屋に注文して作ってもらい、次第に格好がついてきた。

（元教育長・郷土史家）